

立春から数えて二百十日目にあたる九月一日頃は台風が多い時季。

雑節ではこの日を“二百十日”と呼びます。

富山市八尾町の「おわら風の盆」は、嵐を鎮め風を鎮め五穀豊穰を祈る祭り。

毎年九月一日から三日まで行われます。

越中おわら節に三味線と太鼓、胡弓が伴奏を奏で、踊り手とともに町を練る町流し一。

哀調を帯びた胡弓の音色と情緒のある踊りが、幻想的な世界に引き込みます。

“野分”とは、野を分け、草木を吹き分ける荒々しい風のこと。

古い時代には台風のことを“野分”、

野分めいた風の吹くことを“野分たつ”と表現しています。

枕草子や徒然草では野分のあとの情景は、風情のあるものととらえています。

野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。

『枕草子 一八九段』

(野分の吹いた翌日は、たいへんしみじみとした感じがしておもしろい。)

野分が吹きすぎると、秋は深まっています。

ふるさとの風

平成二十九年 長月

初秋— 野分吹くころに

おおかみ とおのみや
大神の遙宮

たきはらのみや

— 瀧原宮 —

時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、
「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。
傍国の可憐国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。

『日本書紀』

伊勢は、常世からの波が打ち寄せる美しい国、大和の東方に位置する日出る地一。
永遠に静まるべき理想の地に皇大神宮が創建されたのは、天照大神の教えによる。
それは、遙か二千年昔のことである。

「神宮とは、皇大神宮、豊受大神宮の二宮および二宮に所属する別宮、摂社、末社、所管社を含めての総称である。」

「神宮所属の社のうち、宮号を宣下されたものを別宮といい、正宮について格式がある。すでに延暦儀式帳に皇大神宮所属の荒祭宮、月讀宮、伊雜宮、瀧原宮、同竝宮、豊受大神宮所属の多賀宮の併せて六宮が見え、延喜の大神宮式には、皇大神宮所属の伊佐奈岐宮が加わり七宮が見える。その後も宮号の宣下があり、現在は皇大神宮に十所、豊受大神宮に四所があり、十四別宮と称されている。」

「神宮所属の社には、別宮のほか百九社の摂社、末社、所管社がある。摂社は、延喜式神名帳に所載の社であり、末社は神名帳に記載されていないが、延暦儀式帳に記載のある社である。そのほかに正宮及び別宮所管の社があり、これを所管社という。」

『神宮便覧』

熊野古道をたどり大台山系へと続く森は、太古の自然が息づく一。

皇大神宮の別宮たきはらのみや たきはらのならびのみや瀧原宮と瀧原竝宮は、宮川支流の大内山川が溪谷をなして流れる山間に位置する。正宮の「わけみや」を意味する別宮は、祭典なども正宮に準じ執り行われる。

清らかな水と緑、そして静寂さに抱かれ鎮まる社は、皇大神宮から遠く離れていることから磯部の伊雜宮とともに「大神の遙宮」と称され、『皇太神宮儀式帳』延暦二十三年(804)や延長五年(927)成立の『延喜式(伊勢太神宮)』からもそのことが窺われる。

タキハラノミヤイチキン イセシマノクニサカヒノオホヤマナカニアリ ダイジンクウノニシサル
瀧原宮一院。伊勢志摩兩國 塚 大山中在。大神宮以西相去九十二里。
マフス アマテラスオホミカミトホノミヤト
稱天照大神遙宮。

『皇太神宮儀式帳』

瀧原宮の創建は皇大神宮よりも古く、『倭姫命世記』によると約二千年前まで遡る。

第十一代垂仁天皇の皇女倭姫命が御杖代として天照大御神の御鎮座地を求めて巡行した際、土地の神、真奈胡神の助けによって急流を渡り、「大河の瀧原の国」という美しい土地にたどり着き、宮を建てたと記されている。

その処より河上を指して幸行すれば、砂流るる速瀬ありき。時に真奈胡神参り相ひて、度し奉りき。その瀬を真奈胡の御瀬と号けたまひて、御瀬社を定め給ひき。その処より幸行するに、美き地に到り給ひぬ。真奈胡神に、「国の名は何ぞ」と問ひ給ひき。「大河の瀧原の国」と白しき。その処を宇大の大字祢奈をして、荒草を薙り掃はしめて、宮造りして坐さしめたまひき。「この地は皇太神の欲し給ふ地にはあらず」と悟したまひき。

【口語訳】

その処(相鹿瀬)から宮川の上流を指してお進みになると、砂が流れる速瀬があった。時に真奈胡神が参上して、倭姫命をお渡し申しあげた。そこで、その瀬を真奈胡の御瀬とお名づけになって、その地に御瀬社をお定めになった。その処からお進みになると、美しい地にお着きになった。真奈胡神に、「この国の名は何と言うか」と問ひ給うたところ、真奈胡神

は、「大河の滝原の国と申します」とお答え申しあげた。その処を、宇大の大字祢奈に荒草を刈り掃わしめて、宮を造って、天照大神を鎮座申しあげ給うた。ところが、「この地は我の欲する地ではない」との天照大神のお悟しであった。『倭姫命世記注釈』

※文中の御瀬社は、現在の皇太神宮摂社多岐原神社のこと。祭神は真奈胡神で真奈胡神社とも称される。

また、『大宮町史』には、「これとは別の創祀説として、伊勢と志摩との国境にあって、大内山川沿いに南島地方との交通が開けていたことより、この地方にある神宮の御贄地である神戸（かんべ・うくら・たしからなど）の民が、この地に集まって大神宮を遙祭したことから起こったものであるという説もある。⁽¹²⁾（補注⁽¹²⁾『神宮典略』所引、菌田守夏の説。阪本広太郎氏『神宮祭祀概説』（昭和四十年、神宮司庁。）また、これは中世以降に神宮領である御厨御菌の地に、多く祭られた神明社のはじまりとも言われる（阪本広太郎氏『神宮祭祀概説』。）」ともあり、瀧原宮の起源については諸説あることが窺われる。

瀧原の名は、鎮座地の地名から。周辺の大小様々な滝の存在にちなむという。

社名の瀧原は、鎮座地の地名で、垂仁天皇二五年に倭姫命が皇大神をいただいて、この地に至った時、出迎えた真奈胡の神が、「大河の瀧原の国」（『倭姫命世記』）と答えたことによっている。大河とは、度会の大河（『皇大神宮年中行事』所収の詔刀に、「度会ノ河上ノ瀧原村」とみえる。）で、ここでは宮川支流の大内山川を指している。鎮座地周辺の河川には、江戸時代以前、既に四十八の瀧⁽³⁾が知られており、それらの瀧の所在する原野を瀧原と称した。

並宮は、『太神宮参詣記』に「瀧原並宮両所軒ヲナラベテ」とあるように、瀧原宮地内の西側（『神宮雑例集』）に並立して建っていたことによる。

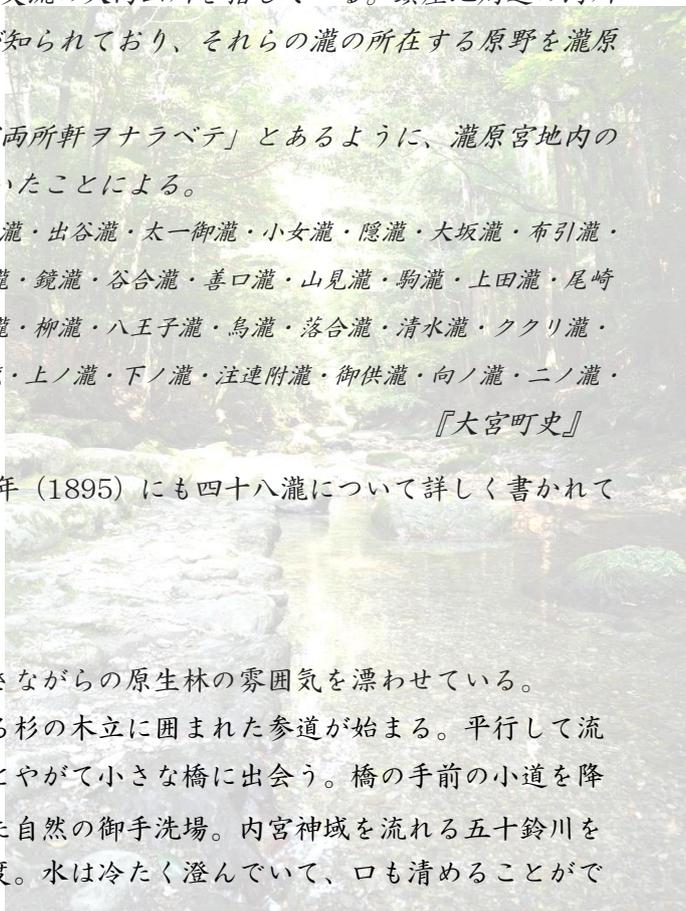
補注⁽³⁾ 四十八瀧は、御調瀧・好瀧・吹瀧・長瀧・出谷瀧・太一御瀧・小女瀧・隠瀧・大坂瀧・布引瀧・銚子瀧・紅葉瀧・身毛下瀧・岩瀬瀧・尾ハフシ瀧・鏡瀧・谷合瀧・善口瀧・山見瀧・駒瀧・上田瀧・尾崎瀧・中山瀧・御影瀧・神船瀧・袂瀧・杉瀧・船瀧・柳瀧・八王子瀧・鳥瀧・落合瀧・清水瀧・ククリ瀧・神楽瀧・御休瀧・下馬瀧・耀瀧・岩船瀧・二ノ瀧・上ノ瀧・下ノ瀧・注連附瀧・御供瀧・向ノ瀧・二ノ瀧・三ノ瀧である。（『太神宮本記帰正鈔』）。『大宮町史』

また、『神都名勝誌卷之六』明治二十八年（1895）にも四十八瀧について詳しく書かれている。

千山万水一。瀧原宮は深山の中である。

およそ四十四ヘクタールの宮域は、古代さながらの原生林の雰囲気を漂わせている。

一の鳥居をくぐると樹齢数百年を越える杉の木立に囲まれた参道が始まる。平行して流れる川のせせらぎの音を聞きながら進むとやがて小さな橋に出会う。橋の手前の小道を降りていくと、そこは頓登川とんどうがわの流れが作った自然の御手洗場。内宮神域を流れる五十鈴川を連想させる。川底が見通せるほどの透明度。水は冷たく澄んでいて、口も清めることがで



きる。再び参道を進む。森が途切れた地に白と黒の玉石が整然と敷き詰められ、玉垣を巡らした瀧原宮と瀧原竝宮の二宮が鎮座する。向かって右に瀧原宮、左に瀧原竝宮で参拝もその順序で行う。

二宮の祭神は共に天照坐皇大御神御魂あまてらしすめのおおみかみのみたまで、瀧原宮がその和魂にぎみたま、瀧原竝宮が荒魂あらみたまを祀り、内宮において荒祭宮があるのと同様の祀り方である。両別宮とも内削ぎの千木と6本の鯉木をもつ萱葺の神明造りで簡素そのもの。皇大神宮とよく似た荘厳な雰囲気は漂うが規模は一回り小さい。

瀧原宮の横手に見える細長い建物が御船倉みふなくら。「御船殿みふなどの」とも呼ばれ『儀式帳』にも「御船殿一字」とあり、正殿の古い御船代みふなしろ（御神体を納める御樋代みひしろを入れる船形の箱）が納められている。倭姫命が巡行で使われた御船が納められていたものともいわれている。岡田登氏は、『伊勢の大神宮とその周辺を巡る』の中で御船倉について次のように記している。

「当宮で注目されるのは、御船倉みふな（殿）と呼ばれる細くて小さな建物である。神宮関係の建物で唯一のもので、倭姫命が巡行された折に使用した船が入れられていたものと言われているが、同じ遥宮である伊雑宮になく、両宮相並ぶ当宮にあることからすると、和御魂と荒御魂が東西（日の出と日没）移動することを考えてのものではなかろうか。御神体を入れた御樋代みひしろを入れる容器を御船代みふなしろと呼んでいること、また江戸時代まで皇大神宮神主・荒木田氏の氏寺であった玉城町の田宮寺に御船殿みふなしろ（「伊勢の神宮と田丸」『近畿文化』七一〇号参照）があったことからすると、このように考えられよう。これはエジプトのクフ王（王をラー神〈太陽神〉と考えている）のピラミッドに、太陽の船が発見されていることからすると、太陽（天照大神）の乗り物を両御魂に供えていたものと考えられる。」

祭祀は皇大神宮に準じて執り行われ、三節祭（六月・十二月の月次祭と神嘗祭）と祈年祭・新嘗祭には皇室から幣帛が供えられる。

また、神宮の公の祭事以外に七月二十二日には「夏の御祭ごきい」、十月二十二日には「秋の御祭」が地元の人々によって行われる。これは、瀧原宮の大麻を受けて稲田にさし、豊作を祈願するもので近隣からの参拝者で賑わう。

瀧原宮の宮域内には、若宮神社わかみや・長由介神社ながゆけ・川島神社かわしまの三社の所管社が所在する。

・若宮神社……「天若宮とも称し、本宮の東に南面して鎮座する。創祀の年代、祭神は不明であるが、鎌倉時代の安貞二年（1228）の『内宮遷宮記』に初めて見える。」
（『大宮町史』）

祭神は、瀧原ゆかりの若宮神とも水分神ともいう説もある。

・長由介神社…「長由気とも記す。本宮の東に、西面して鎮座する。祭神は、長由介と止由気との類似から豊受大神の御霊とみる説もあるが不明。創祀年代も不明であるが、若宮社とともに『年中行事』や『氏経神事記』にみえる。」

（『大宮町史』）

祭神は長由介神で、瀧原宮の御饌を司る社だともいわれている。また、江戸時代には長由介が長生きに通じるとして、長寿祈願の参拝者で賑わったと伝えられる。

- ・川島神社……「河島とも記す。長由介神社に合わせ祀る。創祀年代、祭神ともに不明。『年中行事』や『氏経神事記』に、若宮社・長由介社とともにみえる。寛正以降社殿廢絶し、江戸期には所在不明で再興されなかった。(中略)明治七年、長由介神社内に鎮座し、現在に至る。」(『大宮町史』)

瀧原宮から約六キロ下流、宮川の西べりに鎮座する多岐原神社は、皇大神宮の摂社である。祭神は真奈胡神、真奈胡神社とも称される。地元では「まなごさん」と呼ばれる土地の神で信仰の厚いことで知られる。倭姫命が宮川を渡る際に助けたことから命が社を定めたと伝えられる。『倭姫命世記』の文中で「御瀬社」とあるのは多岐原神社のことである。

社頭には享保十七年(1732)三瀬川村寄進の常夜燈二基と、紀州和歌山藩が享保九年(1724)に建立した「殺生禁断」の石標がある。また、神宮の神社では珍しく賽銭箱が置かれている。尚、多岐原神社に詳しい『麻奈胡由来記』は『大宮町史』に収録されている。

かつてここには「三瀬の渡し」があった。江戸時代の熊野参詣道は、坂瀬峠を越えると、三瀬谷の集落に向かわず、宮川の河原に出て渡し船に乗って対岸に渡っていた。渡し船は明治時代に廢止されたが、平成二十二年(2010)地元住民によって復活し現在に至っている。

多岐原神社と瀧原宮を結ぶ道は、熊野三山へ向かう巡礼路の一部である。

鎌倉時代初め、西行法師が伊勢路を訪れたことはよく知られる。

西行の伊勢在住は、治承三・四年(1179・1180)から文治二年(1186)と伝えられているが、瀧原の地にも立ち寄り瀧原宮を参拝したと窺わせる歌が、『伊勢名勝志』(明治二十二年)、『勢陽雜記』(明暦二年)、『神都名勝誌』(明治二十八年)等に載せられている。

熊野街道を南に抜ける頓登の丸尾山公園山手に建つ歌碑には、西行の歌だけでなく経信の歌も併せて刻まれているが、いずれも『夫木和歌抄』に収められているものである。

浪と見る花のしづ枝のいわまくら 瀧の宮にや音よどむらん 西行
瀧の原散りて乱るる花みれば ぬひだにあへぬ錦なりけり 経信

この「浪と見る～」の歌については、西行の私家集『山家集』には載せられてなく、この歌が西行が瀧原宮を訪れて詠んだ事実の確証はないと疑問視する意見もある。また、皇大神宮の所管社「瀧祭神」を詠んだとされる説もある。この事については『三重の西行法師遺跡考』(中川埜梵氏著、昭和五十七年)に詳しく書かれている。

伊勢神宮と熊野三山は古代より祈りの聖地であった。

熊野参詣道・伊勢路は伊勢神宮を起点に、熊野信仰の中心である熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）を目指す巡礼路である。

平安時代以降、多くの巡礼者が熊野三山をめざした。熊野信仰は、皇族から武士・庶民層まで幅広く浸透していたのである。江戸時代になると、人々は伊勢参宮ののち熊野へ、熊野から西国三十三カ所巡礼へという旅を行った。江戸時代後半の享和年間（1801～1804）には、伊勢から熊野への巡礼者は年間二万人以上に達したという。

『西国三十三所名所図会』（暁鐘成著、嘉永六年（1853））によって、巡礼者の旅の状況を詳しく知ることができる。

また、熊野参詣道には伊勢路と紀伊路（中辺路、大辺路、小辺路）のルートがあり多くの人々が踏みしめた古の道が続いている。

平安時代後期の歌謡集『梁塵秘抄』（後白河法皇編纂）はこう詠う。

熊野へ参るには 紀路と伊勢路のどれ近し どれ遠し

廣大慈悲の道なれば 紀路も伊勢路も遠からず

『梁塵秘抄』

熊野へ参詣するには、紀州路と伊勢路とどちらが近いだろうか、どちらが遠いだろうか。

いやいや廣大慈悲の権現へ詣でる念願の道だから、紀州路も伊勢路も、いずれも遠くはないことだ。

熊野参詣道伊勢路は「紀伊山地の霊場と参詣道」として平成十六年（2004）七月、世界遺産に登録されている。

巨杉の生い茂る森、美しい水が流れる空間はまるで桃源郷—。

大神の遙宮— 瀧原宮は、時間を忘れて過ごしたい神域です。

かつて、このあたりには御師の家が二十数軒あり

「瀧原宮講」を組んで集団参拝する人々もあり大変な賑わいであったといえます。

天をつく神杉は、昭和三十四年（1959）の伊勢湾台風で

本宮（内宮・外宮）は多くの神宮杉を失ったが、

瀧原宮では被害が少なく巨木が目立つようになったそうです。

「大河の瀧原の国」に辿り着いた天照大御神と倭姫命—。

神代の昔に誘うような深閑の森に神話の世界が息づいています。



ふるさとの風
平成二十九年 長月
—瀧原宮—

【参考資料】

「大宮町史 歴史編」 大宮町史編纂委員会／編纂 大宮町 L242／オ

「倭姫命世記注釈」 和田嘉寿男／著 和泉書店 L174／ワ

「神宮便覧 平成27年版」 神宮司庁総務部総務課／編 神宮司庁 L174／ジ／15

「神道大系 神宮編1 (皇太神宮儀式帳)」

神道大系編纂会／編集 神道大系編纂会 L170／シ／1

「神都名勝誌 巻四～巻六」 神宮司庁／編 皇學館大学 L243／シ／2

「伊勢の大神宮とその周辺を巡る」 岡田登／著 登龍舎 L174／オ

「神宮神事考證 前篇 増補大神宮叢書7 (太神宮本記歸正鈔)」

御巫 清直／著 吉川弘文館 L174／ダ／7

「三重の西行法師遺跡考 伊勢の風土と文学5」 中川埜梵／著 中川埜梵 L911／ナ

「新編日本古典文学全集 18 枕草子」 小学館 918／シ／18

「新編日本古典文学全集 42 神楽歌 (梁塵秘抄)」 小学館 918／シ／42

「熊野古道伊勢路を歩く 熊野参詣道伊勢路巡礼」

伊藤文彦／著 サンライズ出版 L297／イ

「日本名所風俗図会 18 諸国の巻3 (西国三十三所名所図会)」

林 英夫／編 角川書店 (三重県立図書館蔵)